LES MÉTAMORPHOSES DU CERCLE

ジョルジュ・プーレ

円環の変貌下巻

岡三郎訳

国文社

訳者紹介
岡三郎（おかさぶろう）
1929年に生まれる。現在青山学院大学文学部教授。専攻　比較文学・比較文化。
《著書》『凝視と夢想』（国文社）
《訳書》『ワーズワス・序曲』（国文社），
デューレン『サド侯爵とその時代』（国文社），
カッシーラー『言語と神話』（共訳・国文社），
エリアーデ『神話と夢想と秘儀』（国文社）
現住所　東京都保谷市住吉町 1—11—3

円環の変貌　下巻　ショルジュ・プーレ

1974年 5 月15日　初版第 1 刷発行

訳　者　岡　三　郎
発行者　前　島　幸　視
印刷所　高長印書局
製本所　並　木　製　本

発行所　東京都豊島区南池袋 1-17-3　国文社

3098—7403—2335

円環の変貌 下巻　目次

第十一章　エドガー・ポウ……5
第十二章　アミエル……40
第十三章　フローベール……114
第十四章　ボードレール……142
第十五章　マラルメの《プローズ》……183
第十六章　ヘンリー・ジェイムズ……214
第十七章　クローデル……236
第十八章　三人の詩人……260
Ⅰ　リルケ……260
Ⅱ　エリオット……270
Ⅲ　ギリェン……279
原註……284
訳者あとがき……303
索引……325

〈上巻　目次〉

はしがき
序　論
第一章　ルネサンス
第二章　バロック時代
第三章　パスカル
第四章　十八世紀
第五章　ルソー
第六章　ロマン主義
第七章　ラマルティーヌ
第八章　バルザック
第九章　ヴィニ
第十章　ネルヴァル
原　註
索　引

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

円環の変貌 下巻

第十一章　エドガー・ポウ

エリオット・コールマンに

I

わたしは気絶していた。だが、それでもなお、意識をまったくうしなっていたとはいわない。どのような意識が残っていたかを、わたしはあえて定義しようとも、ましてそれを記述しようともおもわない。だが、すべての意識がうしなわれたのではないのだ。もっとも深い眠りにおいても――そうだ！　狂乱状態においても――そうだ！　気絶状態においても――そうだ！　死に際しても――そうだ！　たとい墓のなかにおいても、意識がすべて失われるわけではないのだ。(註1)

したがって、エドガー・ポウにとっては、睡眠や気絶状態や狂乱状態において依然として意識であるなにかが生き残っているような人間的実在の一時期が存在している。そうした意識は、不確定なものの深淵で不確定なものについての意識として現われ、またその意識自身にもそのように思われる。意識は存在している。だが井戸の奥底に存在しているのだ。気を失い、ただ自分の観念によってのみ照らし出される暗闇のなかに横臥している人間は、自分がやがて目を覚まし生きかえるようなものであるとは思っていない。その意

識は突然彼にあたえられるような何か新奇なものではない。一切のものが失われておらず、したがって何ものも改めて取り戻されてはいない。存在しているのは、ただ、そこに残存し、しかもその混乱した意識の中心に残存している意識だけである。《分厚い壁にかこまれ》[註2]、《あたかも永遠に、壮麗で栄光にみちた不可思議な牢獄にとじこめられて……》[註3]その夢想者の生活は、彼がみる夢以外は一切のものから孤立しているようにおもわれ、それ自身のうちに後退し、それ自身によって生きつつ、《想像の宮殿》[註4]となり、そこには一種の《精神的魔法》[註5]の作用によって即座に観念化されるような感覚だけが入りこむことが許されている。眠っている人間は、遊んでいる子供のようなものである。つまり《子供のころの豊饒な脳髄は、自分で夢中になったり楽しむためには何ら偶発的な外的世界など必要としないのだ……》[註6]。したがってここでは外的世界は、きわめて遥か彼方か、あるいはきわめて漠然とした形態をとる以外にはまったく現われてこないので、外的世界を知覚するためには、それに触れることではなくて、第一そうしたことは不可能であるので、それを夢想すること、つまり、もう一度純粋な内面性に還元することができなければならないだろう。その庇護のもとに《世界の現実がヴィジョンに変容してゆく》[註7]という、心霊的限界を超えて実在し拡大してゆくものは何ひとつ存在しない。完全に精神的な宇宙、《変化に富んだ感動とこのうえなく激しく、またこのうえなく陶然とした刺激とから成り立っている宇宙》[註8]だけが残存しているのだ。

断崖や霧、城壁などによって囲まれている場所、そのむこうにはもはや他の場所など存在しないような場所といったものを、ポウの思考は何よりもまずみずからの冥府として形づくる。どんなものも、またどんなひとも、その囲いを乗り越えてゆくことはできない。

その谷間には、案内されずに足を踏み入れたものは誰もいなかった。なぜならその谷間は、そのうえに大きく突き出るようにして、谷間で一番心地よい奥まった所から太陽のひかりをすっかり締め出している巨大な山なみにかこまれ、人里から遠く離れていたからである。附近には踏みかためられた小道もまったくなかった。したがってわたしたちの幸福な家に行きつくためには、何千本もの森の木立ちの葉を力をこめて押しのけたり、何百万もの美しく香り高く咲き匂う花々を踏みつぶしてゆかなければならない。だからこそわたしたちは自分たちだけで暮していて、この谷間のそとの世界については何も知らなかった……(註9)

太陽が沈もうとしている西方を除いて周囲には森林の緑の壁がそびえ立っていた。急に流れの向きを変えて、たちまち視角から姿を消す小川は、牢獄からの出口が全然ないのに似ていたが、樹々の深い緑の葉のなかに吸い込まれているようだった。(註10)

神聖な天界から射す光線は、
その都会の長い夜のうえにさしてこない。
だが、凄愴の海から射す光が
小塔のうえに音もなく降りそそいでいる。(註11)

したがって出入口は全然ないのだ。植物ないし液体の豊饒さが、人間や光が入り込み、河川が流出するのを妨げている。こうした地域のなかで動くものといえば、奔流のように流れ去るのではなくて、捕捉された諸要素の単純な旋回運動によって緩慢な渦巻きの中心部に涌き出てくるような感じである。こうしてイメージの発生が決定される。だがそうしたイメージはどこから生じてくるのだろうか。そこ以外に場所がないの

だから、どこか別の場所からではないし、《長い時間》という連続において先行するものは何一つなく、同一の風景がつねに作り直されているのだから、前もって生じるのでもない。すなわち、

刻一刻と木の葉の茂みで、舟は、越えがたく通り抜けられないような壁のできた魔法の円環のなかに閉じこめられるような感じだった……(註12)

それゆえ、《魔法の円環》の虜囚となった思考は、単調な限界線にそってすすむことで満足する。外部のいかなる事件といえども、その回路を妨害したり変化をつけたりするに至らない。精神は、その夢想のなかのそこかしこで、同一のイメージにつつまれている自己の夢想に出会うだけである。それらのイメージは互いに対等であり、同じ思考に宿る常連なのだ。こうしてまなざしは――先見的であれ、回顧的であれ――体験された時間的持続のさまざまな方向にのめり込みつつも、あらゆる点がつねに互いに類似しているような抽象的な線をそこに見出すにすぎず、ついには一種の絶対的な過去と未来、つまり他の場所がないということが空間を限定しているのと同じように時間を限定している初源的でかつ究極的な夜のなかに、消え去ってゆく。

このようなものがエドガー・ポウの詩である。すくなくとも彼が書かなかったけれども彼の言葉によって指し示され暗示されたままになっている詩とはそのようなものである。なぜなら言葉の力に彼がかけた期待にもかかわらず、言葉では、明確にしがたいものを明確にすることができていないからである。夢が睡眠中の意識領域に属しているのと同じように、言葉は昼間の意識領域に属している。ものを書く夢想者はもはや

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

目覚めている人間にすぎない。もっとも深い睡眠においても、そこに意識をともなっている以上、すべてが失われているわけではない。だがその意識が睡眠や夢のなかから離脱すると、たちまち一切は失われる。なぜならそこにはきわめて遠くて、またきわめて不明確な関係しか睡眠とのあいだに打ちたてえないような分離した意識が存在しているに過ぎないからである。

だからこそ、目を覚ますということはつねにエドガー・ポウにとっては実存の危機的瞬間なのだ。ひとつの新しい生の最初の瞬間は、何よりもまず、いままさに捨て去ろうとしている生の最後の瞬間として現われる。それは、いままさに終結させようとしている状態をさして混乱もせずに理解できる瞬間であり、夢がほぼ見分けがつくようになり、ほとんど表現できるものとなり、精神から発するまばゆい光がまだ夢を霧散させないでいるような一種の過渡的な時期である。

しかしながら、ポウの作品において幾度となく、《完全な無意識の状態から、最初のかすかなぼんやりとした実在感へと脱け出す》(註13)ような多くの人間がみられることは事実である。彼自身、《恐るべき正気の合い間》に、《絶対的無意識》(註14)の時期を経験したと、あるとき述べている。しかし、いまここで問題となるのは、意識が存在するのをやめることができたとか、最後には恐るべき正気に至ったということではない。問題なのは、意識がこれら二つの状態の合い間に再び存在しはじめると、その新たな再開が、取り戻しとか再生としてではなくて、夢を思考することが可能であること以外にはまだ夢と区別できないような思考の緩慢な出現となってはっきり現われてくることである。

だが意識が夢を思考するというまさにそのことのゆえに、意識はたちまちにしてもはやその夢を思考する

ことができなくなるだろう。夢についての一切の意識は夢から離脱する。それは断絶であり隔離である。

このうえなく深い昏睡状態から目を覚ますとき、われわれは何かの夢がつくりなす蜘蛛の網のような薄紗を破るのだ。しかもその一秒後には（その薄紗が非常に脆いものであったので）夢をみていたことを憶えていない。(註15)

詩的思考をしっかりと把握しなければならないのは、まさにこの点である。つまりみずからについての意識をとりもどしつつ、それまで生きていた暗い場所についての意識をまさに失おうとする最初にして最後のこの一点である。心ならずも光と言葉に立ち至るためには、自己の聖域を心ならずも破壊せざるをえない。まなざしそのもの、つまりそこから遠ざかりつつ投げかける最後のまなざしは、破壊的なまなざしである。もしアッシャー家がことごとく深淵のなかに滑り込んでゆくとすれば、それは目覚めの強烈さがその崩壊を決定しているからである。光が亀裂を大きく開けてさし込んでくる。夜の世界は忘却の水面で消滅しようとする。だがその世界が消滅するまえに、作者であると同時にこの破滅の目撃者である人物は最後の別れの一瞥を投げかける。それがこの詩人の使命である。それは彼が別れ去るものを意識すること、つまりやがてそうではなくなるものに先ずなることにあるのだ。

失神状態から再びよみがえる際に二つの段階がある。その第一は精神的ないし霊的な存在の感覚であり、第二段階は肉体的存在の感覚である。(註16)

ところでこの二つの段階のうち、さし当りいま重要なのはその第一段階のほうだけである。問題なのはまず現実的な生を意識することではなくて、それに先行している霊的な存在、《超世俗的なる深淵についての雄弁な記憶》(註17)である。それから後、一瞬ほどたってから、自分が誰なのが、どこにいるのかを知るというような、それなりに重要な他のさまざまな疑問を投げかけることができる。すると快楽なり恐怖なりがこうした疑問にきわめて正確な回答をしてくれる。こうなると余りに早々と目覚めないことが重要になってくる。《瞬間的直観》(註18)がつくる微妙な空間のなかに、われわれがその横糸を断ち切る世界のイメージをわれわれの精神のなかに固定することは恐らく可能であろう。たしかにわれわれはその横糸を断ち切るが、そもそもそれはわれわれが作ったものであり、われわれはそれに覆われていたのだ。まさにこれこそが、失われることがなく、いまもなお全然失われていないものである。目覚める直前、つまり睡眠状態が終る直前に《知覚しがたいほどの時間的持続をもった点》(註19)といった一点があり、そこでは《覚醒状態と睡眠状態が結合している》(註20)。そこにはすべてがまだ包含されている。その点を存続させたり、みずからそこに存続していることは不可能である。だが恐らくその受動的な豊饒さを観念や言葉に変容することは禁じられてはいない。そうするためにはその中間点に身をおかなければならないが、それは《その状態を持続できるからではなく、――その点を点以上のものにすることができるからではなく、――自分にはその点から即座にはっきり目を覚ますことができ、こうしてその点そのものを記憶の領域に移すことができるからである》(註21)とポウは述べている。

だが、記憶の領域に移される瞬間から、夢はもはや夢ではない。それは夢についての思い出にすぎない。目覚めた人間としてのその全生涯をつうじてポウは、ネルヴァルと同様に、夢の状態を取り戻そうと願って

いた。かれは思い出にかこまれて歩いてゆくのだが、その思い出は幻影にすぎないのだ。

> 現世的生活のさまざまな宿命のなかを、それよりもさらに広大な――過ぎ去った時間のなかではるか遠くにありながら、しかも限りなく恐ろしい――ある宿命についての、かすかではあるが常に存在している大いなる記憶に囲まれて、われわれはさまよっているのだ。
>
> われわれは青年期をとりわけそのような幻影につきまとわれて生きているが、けっしてそうした幻影を夢と間違えることはない。われわれはそうしたものを大いなる記憶だとわきまえている。(註22)

要するにその夢はもはや夢ではなくなっている。それは記憶に、つまり対象をはっきり想像できずにわきまえているようなものから距離をおいたところにしか位置づけられないような思考の作用になっているのだ。このようなことは、みずから思考するものの彼方に、しかもまったく違った条件にある自己を発見してゆくような、すべての思考についていえる。思考は間隔を測定する。もはやいままで経験してきたものをいま経験していることに結びつけることはしない。思考は忘却によって妨害される。

> それ以来わたしは、喜びから悲しみにであろうと、悲しみから喜びにであろうと、急激な推移によって、この種の部分的な忘却――そうした取り替わりの際の変化の度合いにぴったり比例する程度の忘れっぽさが通常もたらされるものであることに気がついたのです。(註23)

ポウがここで死を免かれた難破した人間の感情について述べていることは、そっくりそのままこの詩人に

ついてあてはまる。詩人は現実にたち戻ればもはやその夢を《実感する》ことは不可能である。かれにはそれらの夢を過ぎ去ったものとしてしか心に思い浮べることができるにすぎない。そこからポウの詩のもつ非現実的な雰囲気が生まれてくる。かれの詩は、その対象を明確に表現することにはならないが、それはその対象がそれ自体表現しがたいものであるという理由だけでなく、その対象があまりにも深く記憶の奥底に後退してしまっているために、もはやそれの所在を見つけることも現実的なものにすることもできないからである。じつに長い間をおいて、別段うながされることもないのに、再びそれが意識に現われうるのは事実である。

> 気を失った経験のない者は、赤く燃える炭火のなかに、不可思議な宮殿やむやみに懐しい人たちの顔を見出すひとではない。多くの人の目には映らぬ悲しいヴィジョンが中空に浮遊しているのをみつめるひとではない……(註24)

だが浮遊しているヴィジョンを凝視するひとには、なぜそうしたヴィジョンがかれには奇妙であると同時に懐しくおもわれるのか、またなぜ大気のなかに浮遊しているのかわからない。ある巨大な不明確な領域がそうしたヴィジョンを包み、それらが時間的持続のなかに何らかの場所を占めるのを妨げているのだ。そうしたヴィジョンは、それらを不確定な広がりをとおして垣間見る人間から切り離されている。記憶錯誤(パラムネジー)の現象にみられるように、それらをいかなる既知の過去に結びつけることも位置づけることも不可能である。それらはまなざしのとどく極限において、ついに純粋な先行性をもつ領域ともいうべきところに滑りこんでしまっている。

なにか空に漂うようなもの、霊的で意味あり気な眼差し、音楽的だが悲しい物音などについての記憶、追い払うことのできない記憶というものがある。幻影のように――ぼんやりとして定めなく変りやすい思い出がある……(註25)

……わたしのごく初期の幼年時代についてのおぼろげなヴィジョン――まだ記憶そのものが生まれていなかった頃の、まことにとりとめもない、雑然とした思い出。(註26)

記憶そのものがまだ生まれていなかったような頃の思い出、幻影の幻影であるようなボウの詩は、およそこの世でもっとも不確定なものとなる。それは空漠たる思考の周辺にあって、すでに過ぎ去り、忘れ去られ、周辺に遠のいている栄光なのだ。

かくてその王宮のあたりでは、かつて
薔薇色に咲きにおった栄光も
いまは、ただ、葬り去られた昔日の
はかない思い出話にすぎぬ。(註27)

したがって思い出のこうした詩は最後には忘却の詩となる。同じように漠然としたものに脅かされつつも、それが現前することによって精神を虚無から救い出そうとする数々の思い出される形態をそこに喚起するだけの力を見出してゆくラマルティーヌの詩と、これほど違うものはない。なぜならラマルティーヌにお

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com